

「何の価値もないではないか」という人たちの価値、
それを、ちゃんとみていこうとする姿勢がなければ、
社会はとても脆いものになっていく

保健師 田原 浩子

海老原宏美様

宏美様の声のトーン、言い回し。

そして、自己紹介にあっては、お仕事に「社会変革」と言い切れる。

「気の強い、尖った人やなあ」と思ったのが、私の第一印象でした。申し訳ありません。

しかし、進行性の難病で、「死んでいく身体の中に生き続けている感じ」だからこそ、重度障害者が地域で生きる意義を、切迫感を伴って主張しておられる、直球勝負の表現方法なんだと、すぐに印象を改めました。

お話の中で、「人の価値」についていろいろな方面からお話をされておられましたが、私は、次の部分を大変印象強く、共感いたしました。

「ある社会的弱者を切り捨てたら、また次の弱者探しが始まる。…その時々
の情勢によって強い人は変わる。社会にとって必要な人が変わる。そんな不安
定な価値だけを信じて、その時の目の前の人の価値だけを見て、その時その時
の社会的弱者を切り捨てるのは危ないと思う。パッと見て、何の価値もないで
はないかという人たちの価値をちゃんと見ていこうとする姿勢がなければ、社
会はとても脆いものになっていくのではないか。そういう、強いものだけが残
る社会だと、みんないつ切り捨てられるのかと恐怖に怯えながら生きていくこ
とになる。」という部分です。

これは、重度障害者に限らず、いろいろな社会組織の中で言えることだと思
います。

「重度障害者が安心して生きる社会は、誰もが安心して生きる社会だと思う。」
というコメントにも合点がいきました。

「価値は或るものでなく、創るもの」

まさにそうだと思います。私も保健師という職業柄から、「人の価値観」をテーマに事業に取り組んだことがあります。動き方次第で、人は変わっていくものという経験をしております。

ただ、いつの世も、強い人が存在するのが世の常で、いろんな方法での圧力が存在するのも確かです。

その打開策としては、「フォローする人を増やすことだよ」と、ある方から教わりました。フォロー者が少ないとうまく進みにくい現状があります。

大ちゃんこと、穴戸大祐様監督の映画「風は生きよという」の上映は、フォロー者を増やすのにとっても有効だと思います。

運命でしょうか、現在、障害部門で業務しております。

私も、「共に価値を創れる社会」を目指して、フォロー者の一員として、取り組んで参りたいと思います。言うは易しで、なかなか価値観もバラバラな現状、障害者の方々とともに、まずは「価値を創れる人育て」に関して、できるところから・・・です。地道に根気強く、時間がかかるかもしれません。映画上映も機会あれば、入れてみたいです。

貴重なご講話をありがとうございました。宏美様、大ちゃんの今後のますますのご活躍を祈念しております。

また、ご縁をくださったゆきさんにも感謝いたします。

このたび、資料として添付してくださった朝日新聞掲載の社説「憐れみの福祉さようなら」は、障害分野で「地域生活支援拠点整備事業」を進める上で、参考になる資料と思いました。

でも、1991年に書かれた文章なのです。それから20-30年近く経ていることにも、ちょっとびっくりです。

情報が届き、変革がおこるための経路に何らかの課題があるのでしょうか・・・。